

氏 名	岩井 淳
学 位 の 種 類	博士（ 史学 ）
学 位 記 番 号	人博 第 84 号
学位授与の日付	平成 28 年 3 月 20 日
課程・論文の別	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題名	ピューリタン革命の世界史 —国際関係のなかの千年王国論—
論文審査委員	主査 河原 温 委員 中嶋 毅 委員 大西 晴樹（明治学院大学）

【論文の内容の要旨】

論文要旨

氏名 岩井 淳



本論文は、千年王国論と国際関係という視座を設けて、初期ステュアート期からピューリタン革命期における独立派聖職者の思想と活動やクロムウェル政権の外交政策を考察したものである。最初に序章では、研究史をたどり、千年王国論と国際関係という二つの視座を説明した後、本論文の課題を提示した。

本論文の課題は、大きく三つある。それは、第一に、初期ステュアート期からピューリタン革命までの国際関係に着目し、それが革命の発生にどのように作用し、革命の進展にどのような影響を与えたかを明らかにすること。第二に、ピューリタン革命期の千年王国論を独立派の思想に即して考察し、その意義を解明すること。第三に、1649年の国王処刑を転機として革命の勝利者となった独立派が、どのように変容したかを、国際関係と千年王国論の視座から考えることである。

これらに対して、本論文は、以下のように考える。

第一に、本書は、初期ステュアート期からピューリタン革命までの国際関係を、政府による外交政策と独立派聖職者を中心とするピューリタン・ネットワークに注目して考察した。第1章で見たように、初期ステュアート期のイングランドは、大国スペインとフランスの狭間にあつて「調停者」たらしめたが、親スペインと親フランスの間で揺れ動き、結局、首尾一貫しない外交政策を繰り返した。他方で王室や政府の意向とは相いれないプロテスタント的な対外観が、この時代に成長し、妥協的な王室と次第に対立するようになった。それはピューリタン革命に直結するような対立関係ではなかったが、1630年代になって、国王とロード大主教の行なった宗教政策が、プロテスタント的な見解の持ち主を刺激し、カトリックの復興を図るものと受け取られると、亀裂は次第に深まった。

他方、第2章で示したように、地方社会では、ピューリタンの信仰を受け入れたジェントリ層が実力をつけてきた。17世紀前半、彼らの中には、ピューリタン聖職者のパトロンとなり、聖職者や神学者の影響を受けて、自ら千年王国的な信仰を表明する者すらいた。ピューリタン・ジェントリでは、アメリカ入植事業に興味をもつ者がいて、新興貿易商人とのネットワークができつつあった。こうして政府に不満を持つ人々の繋がりが徐々に出来上がったのである。

このネットワークの結節点には、第3章で見たように、後に独立派となる聖職者のグループが存在した。彼らの中には、1620年前後にケンブリッジ大学で過ごした人々が多数いて、「ケンブリッジ・コネクション」と呼ばれる結び付きがあった。彼らは、世俗の仲間とも交流をもち、ピューリタン・ジェントリや新興貿易商人を巻き込んだネットワークが形成された。地理的には、このネットワークは、独立派聖職者の亡命や移住などによって、オランダやニューイングランドまで広がった。こうしてピューリタン革命までの時期に、中央の政府がとった外交政策と、地方や植民地でひろがったピューリタン・ネットワークは、いずれも重要な意味をもった。国際関係抜きに革命の原因は語れないのである。

第二に、1630年代にオランダへ亡命した独立派の聖職者たちは、40年にピューリタン革命が始まると、帰国の途についた。彼らは、自立した信者集団からなる独立派教会をイングランド各地で樹立していった。ニューイングランドに移住した聖職者とも手紙などで連絡を取り合い、「ニューイングランド方式(様式)」と呼ばれる教会論を採用した。主要な独立派聖職者は、1640年代に、長期議会で千年王国的な説教を行ない、国教会廃棄後の教会を構想したウェストミンスター神学会議に出席し、内戦が始まると従軍牧師になる者もいた。

本論文は、主要な独立派聖職者のうち、第4章でトマス・グッドウィン、第5章でウィリアム・ブリッジを取り上げた。前者は、独立派聖職者のリーダーとなり、1650年代には政府の宗教的指導者となった。後者は、革命期に拠点をノーフォーク州の地方都市に構え、その独立派教会を維持した。こうした違いがあるものの、両者は、ともに国教会廃棄後の教会を構想したウェストミンスター神学会議に出席し、長期議会で千年王国的な説教を行ない、内戦での議会派勝利に貢献した。グッドウィンは、聖書に基づく神学的な議論を積み重ね、キリストの再臨が間近に迫っていることを説得的に述べた。ブリッジも、聖書解釈に依拠して、「反キリスト」の没落が確実で、キリストの再臨が迫っていることを力説した。

独立派の千年王国論は、第4章で見たように、独立派教会を千年王国実現の基盤と考えていた。独立派は、千年王国への特殊な期待に支えられて、教会を設立していったのである。本論文では、千年王国論が国王派の打倒に寄与し、独立派教会の設立が国家教会体制の枠組みを掘り崩したことに注目し、独立派の千年王国論を「革命思想」と規定した。それは、もちろんマルクス主義的な意味合いではなく、宗教色の強い17世紀の文脈における規定である。

千年王国論は、第6章で考察したように、イングランドだけでなく、海を渡ったニューイングランドでも見られた。その担い手は、革命前に大西洋を越えて移住したピューリタンたちだった。ジョン・エリオットは、1620年頃にケンブリッジ大学で学び、1631年にアメリカへ移住した聖職者だった。彼は、グッドウィンやブリッジとも交友関係を保ちながら、アメリカ植民地で先住民布教に尽力した。その際、彼は、先住民をユダヤ人の末裔に位置付け、「先住民＝ユダヤ人」の改宗を千年王国論の観点から説明した。エリオット自身は、真摯に先住民布教と向き合ったが、結果としてニューイングランドの千年王国論は、先住民の同化やアメリカの支配に役立つものだった。本論文では、イングランドの千年王国論を「革命思想」と規定したが、ニューイングランド側から見れば、千年王国論は、イングランドの支配を押し進める「帝国の思想」として機能したと言えるだろう。

第三に、1649年以降、ピューリタン革命は大きく旋回する。1648年末に議会内の長老派が追放され、翌年の国王処刑と共和政政府の樹立によって、独立派は、革命の勝利者となった。その中で、独立派聖職者の対応は、置かれた状況によって多様であったが、ほとんどの者が変容を余儀なくされた。グッドウィンの場合、1640年代に主張した激しい千年王国論は影をひそめ、50年代になると救済論に力点を移した。グッドウィンと同じく独立派聖職者のリーダーとして活躍したのは、ヒュー・ピーターである。第7章で見たように、彼もケンブリッジ大学で学び、革命前にオランダに亡命したが、さらにニューイングランドに移住し、革命後に帰国した。ピューリタン・ネットワークを体現したピーターは、内

戦時に従軍牧師を務め、アイルランドにも遠征するなど革命中に活躍した。彼は、1640年代には千年王国論と国際的なプロテスタント連帯を唱えていたが、50年代になると、国内に目を向け、新生の共和国の安定を説くようになった。彼は、宗教だけでなく、政治や商業にも及ぶイングランド国家の発展を目指したのである。ただ、その中にあっても、ピーターは、アメリカから「ニューイングランド方式」の教会論を学び、オランダから商業や金融の方法を学ぶことが必須であるとし、ピューリタン・ネットワークの枠組みを維持したのである。

ピーターは、アイルランド遠征でも重要な役割を果たした。アイルランド征服において、イングランドからアイルランドに向かう兵士たちは、ウェールズを足場とすることが多かった。従来、ウェールズは、イングランドとの関係でとらえられることが多いが、アイルランドとイングランドの狭間に位置するという観点は見逃せないだろう。ブリテン島の西側にあるウェールズは、アメリカとの繋がりもあり、1630年代の末には「ニューイングランド方式」による独立派教会が設立された。

第8章は、こうした国際関係の中にウェールズをおき、1650年から始まるウェールズ福音宣教を検討した。ウェールズは、1640年代の内戦で国王派の拠点となり、しばしば「暗黒地帯」と呼ばれたが、福音宣教は、こうしたウェールズを改革する運動だった。この運動は、ピーターが立案し、独立派聖職者が中心となって進められたが、ウェールズ出身者が多数参加した。その一人である独立派の説教師ヴァヴァサ・パウエルは、福音宣教をウェールズ改革のチャンスととらえ、運動に尽力した。その彼に推進力を与えたものこそ千年王国論であった。1650年代になると、独立派聖職者の多くは保守化し、千年王国論に関して沈黙するようになる。だが、そうならなかったパウエルは、やがて独立派から第五王国派へと立場を変えていった。第五王国派は、1650年代の千年王国論の主要な担い手となり、クロムウェル政権と対立する運命にあった。

こうした独立派の変容を受けて、1650年代には外交政策にも変化が見られた。オリヴァ・クロムウェルは、国内でも国外でもプロテスタントを保護し、プロテスタント国との同盟を維持する方針をもっていた。しかし、第9章で見たように、1650年代初頭になり、実際に政権が動き出すと、クロムウェルと彼を支える政治家たちは、際限のない戦争を回避し、イングランドの国益を重視するようになる。クロムウェルの外交政策は、プロテスタント外交を放棄したわけではないが、千年王国論に支えられた果てしない聖戦遂行を避け、より現実的な方向を追求したのである。それは、フランスとの同盟を維持しつつ、スペインと戦うという基本方針を採用し、初期ステュアート期の外交政策と比べると、はるかに首尾一貫したものだ。この政策は、1650年代のピーターによる重商主義的なイングランド改革論とも符合するだろう。他方で、1650年代に千年王国論に裏付けられた聖戦の続行を訴えた第五王国派は、1653年末に指名議会が解散された後、プロテクター政府と対立し、弾圧された。こうして革命期の千年王国論は、その担い手が抑圧され、社会的影響力を弱めていったのである。

以上のように、本論文は三つの課題の解明をへて、初期ステュアート期からピューリタン革命期における独立派聖職者の思想と活動やクロムウェル政権の外交政策を考察した。